

「一」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

冬か初冬だったと思う。寒い時候だった。二人の弟が昼飯時から姿を消したまま、夕方になっても帰って来ないのである。弟たちの声が聞こえない家は妙にさびしかった。どこにいても必ず帰って来るべき、おやつの時に帰って来ない。私と母は二人きりでひっそりとお茶をのんでいたが、その時にはもう例の不安が争えない色や線になって、彼女の顔に描き出されていた。それを見ると私はまたぶっとしてしまって、二人のゆくえをあやしむような言葉などおくびにも出さなかった。

豆腐屋が通ると次には夕刊が来、それから街灯というふうには遠慮なく夜は迫って来ても、二人は帰らなかった。家の前の病院の電灯はいつものように赤く、さむざむと暮れてゆく冬の夕方の白つけた空気の中にその色が妙にさびしかった。

ばつと部屋の電灯にも電気が来る、それが来たとき「いよいよ来た」と私は思った。

もちろん母は早くから不安にさいなまれていたにちがいない、しかし私にはそんな早くからその不安をうたえることはできない。(それは私がまちがいに反発することも事実だったが、母はある正直さから自分の時をわきまえないやっかいな心配を恥じてさえたというのもまちがいのない事実なのである。)しかし今はもう電灯も来たのだ。夜になったのだ。あれも心配するのが当然である時が来たのだ。——こう思っ母は捜しに行ってくれと言いに来るにちがいがなかった。

電灯が母の不安を爆発させ、関所であったわけをこういうふうにも考えてもまんざら妥当を欠いてはいないだろう。すなわち時計の針の動きにしろ、日光がうすれてゆく加減にしろ、それは時々刻々の変化で、したがってそれにともなう母の不安もなめらかな増加を見るに過ぎないが、電灯が夜の来たことの争えない証拠であり、敵とした道程標である以上、夜が迫って来る感じはその瞬間飛躍して、ぐんと色の濃いものになり、母の不安ももう

立ってもいてもいられない程度に激変する。

とにかく町中を暗やみに封じこめてしまいう夜が来たのだ。

思った通り母は私の部屋へ入って来た。

「お前この近所にはいないんだよ。○○さんの所にも、××堂にも。お前どっか心当たりがありませんか」

「心配しなくてもすぐ帰って来ますよ」

（中略——「私」は、弟たちが父の所に行ったのではないかと母に言った——）

「だって、歩いて行くのは大変だし。あの子らはお金は持っていないはずなんだよ」

「でもわかりませんよ。一度電話をかけてみたらどうです」

母が立って行った後で、今ごろかけても父はもう帰り道だろうなどと私は考えていた。

しかし電話もだめだった。帰り道だと思っていた父はその晩はいそがしくて会社にて電話口へ出たが、弟たちは行かなかったこと、それから次郎に捜させるということを言って電話を切った、と母はしみながら言った。

とうとう捜して来いと言うのだな！　と思うと私はまた腹が立ってきた。^{問六}「次郎に捜させる！」と父が言ったというのにもかかわらずなのか。

「ね、捜して来ておくれ」

「捜しに行ったってむだですよ。いったいどこにいるかというあてもないのに。いつものことですよ。すぐ心配するんだ。この間だって。——」

と言いながら私は母のおろかなる心配なるものの例を列挙し出して、毎度の心配のまきぞえになって、いつものばかげた捜索にやられるのを徹頭徹尾回避しようとした。

「帰って来ますよ。三郎だって十にもなっているんだから迷子になっても心配なんかありません」

しかし母も負けていずに、迷子を出した不幸な家の考証をはじめた。そして最後には父の命令もあるのだし、

「強情はって行かないのならお父さんに言いつけるよ」と厳しい目をした。

「だって、腹もすいてるし」と私は言った。ほんとうにそうでもあったし、また一つにはこうなれば飯に難くせをつけてすねてやれ、そのうちに帰って来るかもしれないというのが私の腹であった。

「だからご飯も用意してあるから」

と言うので立って行ってみると、電灯の光の下のちゃぶ台の上には私一人分だけの茶わんやその他の陶器がその冷たい肌の上におのおの一つずつの電灯の小さい映像を映し出している。落ちて着いて飯でも食ってやれといういこじな計画も気が乗らなくなってしまう、^{問七}「こんな時には意地にも空腹をかかえて飛び出すというあてつけの方が私の腹立ちには快かったので、私は第一、そんなさびしい食卓では食欲が起こらなかったし、ちゃんと用意までしてあるんだなと思うと、だれが食ってやるものかと思った。」

「お前食べないのかい」

私は腹が立っていたので返事もせず、足音であたり散らかして、どんどん家を飛び出した。

まず私は近所の○○さんや××堂へ行って、弟たちを見なかったかとか、どこかへ行くと言っていないかとかとか言っただけだったが、何の手がかりも得られなかったもので、不平でぶーぶーふくれっ面をしながら暗い道を○○神社の方へ歩き出した。私の心の中の不平は憤りとなって、その道々弟たちの上に燃えた。

「つかまえたなら、なぐりつけてやる」

しかしその報いられない捜索が別に確かなあてのあるものでもなく、そして何というつまらなく腹立たしいことを強いられているのだろーと思ひながら、そのにぎやかな通りを歩いていると、小料理屋の格子から冷たい夜気の中へ白くわきでくる湯気や、しょうゆのたきつまるにおいはたまらなく私の空腹をさびしがらせはじめた

のだった。するとまた、こんな考えも浮かんでくる。――（もう彼らは家へ帰っているかもしれない）そんな気持ちがわいてくると、一人で空腹をおさえながら不熱心にその辺りをほったき歩いている私には、その好都合な想像がやがて本当の事実として映るようになり、無責任にいいかげん歩きまわったのを機会に私はまた急いで家へ帰りはじめた。

「帰っていたら、いきなりなぐってやる」

私はまだ不平を街上に鳴らしながら家まで帰った。

しかし私のそのせきこんだ予想も、家のしきいをまたいだ瞬間にそれがうらぎられていたことがわかった。弟たちはまだ帰っていなかった。しかし会社からは父が帰っていた。

「どうだった」

父はたずねた。

「〇〇神社へ行ったのですがいませんでした」

「××町は。あの・・・は」

「行きませんでした」

「あそこを捜しておいで」

問八

空腹の私に飯も食わさなくても一度近くもない××町までやろうとする父の気持が、乱暴にも、ざんくにも言語道断に思えた。（飯も食わずに〇〇神社まで行ったんだぞ）と心の中ではぶんぶん憤っていた。父の前には温かな湯気を立てているなべがあった。私はそのにおいに力強くひきつけられた。

さっき食わずに出たものを、母がなぜ、飯を食ってから行けと言わないのだろう、私にはそれがまた腹立たしかった。私はまたこじれた考えをいだった。ここで飯を食おうと言いはろう。父は私がもう飯をすませたことだ

と思っていたら私から私がすぐに行けるつもりでいたのだろう。それだから、飯を食おうと言うともどかしがって、飯は後にしてと言うだろう。そこで口答えをしてやろう。別にそのように意地悪い論理を働かしたわけではなかったにせよ、飯を食わせると言った私の心は不平のあまりたしかにその辺を大きくねらっていたにちがいないかった。

「さきにご飯を食べさせてもらいます」

「なんだ、ご飯はあとにしてすぐ行っておいで」

「お腹がへってるんです」

「それじゃ三郎や四郎はどうなんだ。あれらも腹をすかせてるじゃないか」

「それは勝手です」

問九

自分ながら言い切ったなと思った。

問一〇

父がみるみる目に角を立てるのを母は制しながら、さっき食って行けと言ったのを食わずに行ったのだからと言って飯の用意をしてくれた。

私は意地悪くそれを見ながら、うんとこさ食ってやれ、と思っていた。しかし意地もない真正の空腹にその飯は意地でも張りでもなくほんとうにうまかった。しかし私が飯を食いかけるが早い、私はもう捜しに行かなくてもいいようになった。弟たちが帰ってきたのだった。

下駄をぬいでいる小さい足音を聞いた時、私たちはおやと思った、帰ってきたのかな。そう思った瞬間、彼らはいったいどこに今までいたのだろうという疑問やその時まで私の心の底にあった心配が自由によみがえってきた。

電灯の光の下へ、ぱたぱたと姿を現した時彼らは二人とも、しょげて、まじめであった。それで父や母に対す

るこじれた気持もその瞬間ずっとうすれてしまったように思えた。

「帰ってきた」

十になる三郎はものにおびえた表情をしていたし、七つの四郎は泣いていた。

「どこへ行ってた」

父はまず厳しくきいた。三郎は、築港へ軍艦^{かん}を見に行っただと低い神妙な声で答えた。このあいださかんに母に行かせてくれるように三郎がねだっていたのを思い出して私は合点^{あて}がいった。母はいつもの心配性でその時承知しなかったのだった。

「築港へ」

父も母も少しあきれていた。もちろんそれは無鉄砲な遠足に相違^{ちが}なかった。

「ばか、ここまでおいで」

問十一 私父が三郎に厳しく体罰を加えやしないだろうかと思った。

すでに入る時泣いていた四郎は、だんだん泣き声を大きくしてわめきだした。声を大きくすればするほど、そして涙^{なみだ}を流せば流すほど、彼がこの家へ帰りつくまでになめつくした、恐怖^{きょうふ}や、空腹や、たよりなさや苦痛のいたでがそれだけ早くいえるかのように。またその泣き声は

問十二

声の合間合間に四郎は「……でさんちゃんが……したんだよう」と言っただけのわからないうったえをはじめた。

長い間の心配からの解放の気持も私にはよくわかった。それは志賀直哉^{しがなおや}の「真鶴^{まなづる}」や芥川龍之介^{あぐたがわりのすけ}の「トロッコ」にかかっている子どもの気持そっくりの気持であったにちがいないのだ。「しかし四郎あまえてやがるな」と私は思わざるを得なかった。それゆえ、彼をただ泣かせておくだけで何ともかまってやらない母の正当な処置が私には快く思われた。

(梶井基次郎「夕風橋の狸」)

問一

部 a・b の意味として正しいものをそれぞれ選びなさい。

a 目に角を立てる

- 1 驚^{おどろ}いたり怒^{いか}ったりして目つきを変える
- 2 思い知らせるためにひどい目にあわせる
- 3 怒りをふくんだするどい視線を投げる
- 4 あら探しをして何かにつけて敵視する

b 合点がいく

- 1 意見が一致^ちして対立がなくなる
- 2 条件がかなって受け入れられる
- 3 悩み^{なや}ごとが解決してすっきりする
- 4 事情がよく理解でき納得できる

問二

部「例の不安」とありますが、具体的にだれのどのような不安ですか。

問三

部「二人のゆくえをあやしむような言葉などおくびにも出さなかった」ときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 弟たちのことばかり気にしている母が不快なので、母の不安にまったく気づかないふりをしている
- 2 自分が捜しに行けと言われるのがいやなので、親の不安がることを決して言わないようにしている
- 3 親の不安がもっと大きくなると気の毒なので、二人に関することにはなるべくふれないようにしている
- 4 弟たちが帰ってこないことで自分が責められるといやなので、母の不安に同調しないようにしている

問四

——部「家の前の病院の電灯はいつものように赤く、さむざむと暮れてゆく冬の夕方の白った空気の
中にその色が妙にさびしかった」とありますが、「私」が「妙にさびしかった」と感じたのはなぜですか。

1 いつもいる弟たちがいないので、日常とはちがって何かが欠けたような気分がしていたから

2 病院の電灯の赤さが、弟たちが危険な目にあっているかもしれないという悪い想像をさせたから

3 うす暗い辺りの風景とは正反対に赤く燃えるような電灯の光が、身にしみる寒さを意識させたから

4 母の不安な気持を知りながら、たがいに言葉も交わさずにただ刻々と時間だけが過ぎていったから

問五

——部「いよいよ来た」とありますが、「私」は何が「来た」と思ったのですか。具体的に説明しなさい。

問六

——部「『次郎に捜させろ!』と父が言ったというののもどうかわかるものか」とありますが、このとき
の「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 父が私の気持を無視して弟たちを捜させるはずがないという父への信頼が、母に対する不信となって表
れている

2 父の言いなりになって弟たちを捜せと私に命令する母への怒りが、父に対する八つ当たりとなって表れ
ている

3 何としても私に弟たちを捜させようとしている母への反発が、父の言葉はうそではないかという疑いと
なって表れている

4 私に弟たちを捜させろと言う父に対する失望をぬぐいさりたいという願望が、母はうそを言っていると
いう考えとなって表れている

問七

——部「こんな時には意地にもうだれが食ってやるものかと思った」ときの「私」の説明
としてふさわしいものには○、そうでないものには×をつけなさい。

1 私一人だけ先に食べさせ、後で弟たちと食べようとする母に反発している

2 母が何よりも弟たちのことを心配するので、なんとなくさびしさを感じている

3 空腹でいるほうがきん張感を持って弟たちを捜せると自分を納得させようとしている

4 母が何としても弟たちを捜させようとしていることを不快に思っている

5 腹をすかせている弟たちを気づかい、自分は食事をがまんしようとしている

6 食事もせずに出て行く姿を見せつけ、母を申し訳ない気持にさせようとしている

問八

——部「空腹の私に飯も食わさなくても一度近くもない×町までやろうとする父の気持が、乱暴に
も、ざんこくにも言語道断に思えた。(飯も食わずに○神社まで行ったんだぞ)と心の中ではぶんぶん
憤っていた」ときの「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 無断でどこかへ出かけたまま帰ってこないのは弟たちなのに、関係のない私までも罰するかのようにご
飯を食べさせようとしない父のあきれほどこい処置に憤慨している

2 息子の食事の心配もせず平気で再び捜しに行かせようとする父に対して、自分の意志でご飯を食べずに
飛び出したことをたなに上げて、親としてあってはならないことだと憤慨している

3 空腹に耐えてまで捜しにいった自分をねぎらいもせず、これ以上弟たちを捜してもむだだという私の主
張にもまったく耳を貸さない父の冷たさに憤慨している

4 いなくなった幼い弟たちを必死に捜し回ってきた私に再び捜せと命令して、自分だけは平然と食事をし
ようとする父に対して、あまりにも無神経だと憤慨している

問九 — 部「自分ながら言い切ったなと思った」とありますが、「言い切った」とはどういうことですか。

- 1 理想的な存在である父に対してはつきりとまちがいを指摘した
- 2 高圧的な父に対して自分の正しさを最後までしっかりと説明した
- 3 がんこな父をあつさりと納得させるほど強く自己主張した
- 4 絶対的な存在である父に対して堂々と自分の意地をはり通した

問十 — 部「無鉄砲な遠足」とありますが、どのような点が「無鉄砲」のですか。二点書きなさい。

問十一 — 部「私は父が三郎に厳しく体罰を加えやしないだろうかと思った」とありますが、このときの「私」の気持の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 父も母も、三郎のおろかな行動が四郎を巻きこんだことに腹を立てていると思われるので、かわいそうだが厳しく体罰を受けるのは仕方がないとあきらめている
- 2 三郎が父にはとても神妙な態度で接しているが、きっと内心ではねだった時に連れて行ってくれなかった母をうらんでいるにちがいないと想像している
- 3 三郎の神妙な態度が、十分に後悔し父からしかられることを覚悟して帰ってきたことを感じさせるので、これ以上つらい思いをさせたくない和三郎に同情している
- 4 三郎が父や母にしかられることをしてしまったのは事実だが、泣かないで神妙にしている三郎に父が厳しく体罰を加えることがあるだろうかと疑っている

問十二 — ☐に入るものを選びなさい。

- 1 家へようやく帰りついた、重荷を下ろした喜びのあまり
- 2 家で待っていた父から、厳しくしかられる恐怖のあまり

- 3 無責任な外出につきあわせた三郎に対する怒りのあまり
- 4 とにかく初めての冒険をなしたとげたという満足のあまり

問十三 — 部「それゆえ、彼をただ泣かしておくだけで何ともかまってやらない母の正当な処置が私には快く思われた」とありますが、なぜ「母」が「四郎」をかまってやらなかったのだと「私」は考えていますか。

- 1 四郎を泣き止ませるには放っておくのがよい
- 2 四郎のあまえを受け入れない姿勢を示すため
- 3 四郎の泣き虫ぶりに内心うんざりしているため
- 4 四郎ではなく三郎の言い分をよく聞くため

問十四 この文章の後に続く「私」と「弟たち」との物語を百八十字以内で創作しなさい。

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「『ってゆうか、あたし的にはとりあえず、やめたほうがいいかな、とか、思ったりして……』。あいまい言葉のオンパレードとも言える若者たちの会話を聞いていると、何を言いたいのか、相手にきちんと伝わっていないのではと心配してしまいます」と、札幌市の五十代の女性からお便りをいただいた。

問二 「あいまい言葉をたくさん使う若者は、自己主張が苦手という印象があるかもしれません。でも実際には、そうでないという結果も出ています」。フリーアナウンサーとして活躍する梶原しげる（五一）さんが報告を寄せてくれた。

梶原さんは、大学院の心理学研究科に社会人入学。若者言葉とそれを使う側の心理を調査・分析し、修士論文

にまとめている。

調査で取り上げたのは、「ってあるじゃないですか」「なにげに」「とか」など、三十三のあいまい言葉。約二百人の学生を対象に心理や行動を分析したところ、これらの言葉をひんばんに使う人の方が、相手に自分の主張を伝える能力が高いとの結果が出た。

あまり直接的な言い方をする、反発を受けやすく、相手の心にすっと入っていけない。言いたいことは、あまい言葉というオブラートでくすみ、相手が受け入れやすいように表現する——。「それが、彼らなりのコミュニケーション戦略なのでしょう。彼らは知恵を^えしぼって言葉を選んでいいる。その努力は少しは理解してやりたい気がします」と、梶原さんはいう。

ただし、そんな「あいまいコミュニケーション」が機能するのは同年代の仲間同士に限られる。あいまい言葉そのものに拒否反応を示す大人には通じない。それに気づいていないところに、若者たちの戦略ミスがありそう^{きよ}だ。
(橋本五郎^か監修 読売新聞新日本語企画班『新日本語の現場』)

問一 — 部「あいまい言葉をたくさん使う若者は、自己主張が苦手という印象があるかもしれません」とありますが、「自己主張が苦手という印象」はどのようなところから生まれるのですか。

問二 — 部「でも実際には、そうでないという結果も出ています」とありますが、「そうでないという結果」とはどのような結果ですか。具体的に書かれた部分を四十字以内でぬき出し、始めと終わりの三字を書きなさい。

問三 — 部「彼らなりのコミュニケーション戦略」とありますが、具体的にどのような戦略ですか。四十字以内で書きなさい。

問四 — 部「あいまい言葉そのものに拒否反応を示す大人には通じない」とありますが、わかりやすく言うかどうかということですか。四十字以内で書きなさい。

問五 この文章の要旨を八十字以内で書きなさい。

【三】 次の各文の□に入る言葉を選びなさい。

- 1 中学生のA君が小学生の弟にスポーツで負けることは□あるまい。
- 2 秋の箱根の紅葉はともみごとで□にしきの帯をひろげたようだ。
- 3 大切な花が台風でしおれてしまいBさんは□悲しい気持だろう。
- 4 来週行われるピアノの発表会を聞きに□みなさんで来てください。

ア	むしろ	イ	ぜひ	ウ	もっぱら	エ	さぞかし
オ	よもや	カ	どうも	キ	あたかも	ク	なぜ

【四】 次の——部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また、——部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

1	イ	ッ	ショ	ウ	に	ふ	す	2	サ	イ	シ	ン	の	注	意	を	は	ら	う	3	イ	サ	ミ	足	4	セ	イ	ヒ	ン	を	売	る
5	タイ	キ	ョ	ク	に	立	っ	て	も	の	を	見	る	6	採	る	7	省	み	る	8	文	様									

